

今回は、日本経済新聞の記事から紹介します。

先進諸国の平均寿命は、1970 年ごろまで主に乳幼児死亡率など若い年齢層の死亡率低下で延びていた。その後は高齢層の死亡率改善の比重が増え、高齢者のライフスパンが延長するかたちで平均寿命が延びてきた。この傾向は今後も続き高齢者の生存年数はさらに延びる。

高齢期の長期化が進む中、単に生存の長さだけではなく、その期間を健康に過ごせるかどうかなどの生存の「質」の向上に努めることが重要な課題となってくる。その際、重要になるのが健康寿命である。健康寿命とは、人々の生存年数を健康に過ごせる時期と何らかの不健康を抱える時期に分け、健康に過ごすことが期待される平均年数を計算したものだ。

世界保健機関(WHO)が算出した 2007 年の世界の健康寿命の中で、日本人は 76 年(男女計)とトップだった。各国の平均寿命とそこでの健康な期間の割合を見ると、平均寿命が長い国ほど健康な期間の割合も高まる傾向が見られる。

日本の高齢者人口の健康度は上がっているとみられる一方、高齢者の脳卒中の発生率はほとんど変わっていないとのデータもあり、脳卒中による死亡率低下と相まって要介護高齢者は増加していると考えられる。いいかえれば健康高齢者の増加と、要介護者の増加という、高齢社会の光と影が併存する傾向がこれから強まろう。

今後向かう超高齢社会では、働き手人口が減少するため、高齢者に働き手としての役割が求められる、また介護予防の推進によって病後の健康状態が改善した人々にも広く社会参加が求められることになろう。その意味では、定年制度をはじめとする硬直的な働き方の仕組みは経済社会にとって重荷を生み出してしまうかねず、高齢者には年齢と健康度に応じた働きが求められる。今後日本が、世界一の健康長寿を維持し、積極的に生かした社会を築けるかどうかで、長寿化は光とも影ともなり得る。

1) 1970 年ごろまで先進諸国の平均寿命は、どのような理由で延びていましたか？

()

2) 健康寿命とは？

()

3) “高齢社会の光と影の併存”とは？

()

4) 今後向かう超高齢社会では、高齢者にはどのような働きが求められますか？

()

5) 長寿化が、光になるためには日本は、どのような社会を築く必要がありますか？

()